



# やまゆり

学校だより

令和5年3月10日  
91号  
学校長 杉本賢二

校訓 「和の心」  
学校教育目標 「社会に貢献しながら自立する生徒の育成」一気づき・考え・実行するー  
校内研究主題 「WEBQUを活用し学級の安定と活性化を図る」

学校教育重点 「豊かな心の育成」

## 「最後まで本気で一生懸命な姿を見せてくれた卒業式」

昨日、本校の「第76回卒業証書授与式」を行いました。11名の生徒一人一人が「功刀先生」の呼名にしっかりと返事をし、「山口先生」が介助してくれた卒業証書をしっかりと受け取り、道志中学校を巣立ちました。

3学年職員の熱心な指導の成果もあり、一人一人が中学校生活の中で心に残ったことをことばでしっかり表現し、「3月9日」の合唱をしっかりと歌い上げました。コロナ禍でも最後まで、新しいことに挑戦し、創意工夫を重ねた3年生の姿を、1・2年生がしっかりと心に刻みました。

3年間の課程を修了した卒業証書の授与



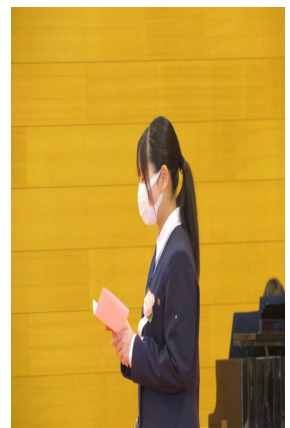
「佐藤PTA会長」の祝辞



答辞:感謝・悩み・挑戦・一致団結・リーダー・本気



「思いを伝える」3年生の発表



1・2年生の態度の良さ↓ 送辞:先輩方の伝統を受け継ぎ、チャレンジしながら発展させる決意



心を一つに最後まで一生懸命・本気で合唱する姿を見せてくれた3年生



卒業生を見つめる功刀先生・山口先生

「ただ楽しいものを求めてはいけない」  
「挑戦の過程の本気さが感動になる」は最後のことば



卒業生の保護者の皆様



多くの来賓の皆様



3年生が卒業式前に「謝恩会」で、先生方に感謝の気持ちを伝えてくれました。



学校教育重点 「健やかな身体の育成」

## 天災は忘れた頃にやってくる

東日本大震災から明日で12年。

あの日の出来事を忘れてはいけません。生徒の皆さんは卒業した3年生が3歳、1年生は1歳でした。覚えているでしょうか。ふるさとや人々の日常生活、願いや希望を一瞬にして打ち砕き、地震による津波は約2万人もの尊い命を奪いました。

過去を見つめ、自分のこととして受けとめて災害に備え、夢に向かって努力しましょう。

### 町の職員で町民への避難放送を続け、命を失った遠藤未希さん

圧倒的な出来事に我が目を疑い、耳を疑った日々がどんどん流れていきました。

そして、テレビや新聞のトップ記事から、いつしか大地震の報道は静かに姿を消していきました。

あの日、大津波が町を襲った宮城県南三陸町志津川で、町民に「高台に避難して下さい」と叫び続けた一人の町役場女性職員がいたことを皆さんは知っていますか。

遠藤未希さん(当時24歳)は大津波警報発令後、約30分間、防災無線で町民の避難を呼びかけたと新聞やテレビで大々的に報じられました。そして、一ヶ月を過ぎた頃遺体で発見されたことも。この時の遠藤さんの必死の避難放送を「天使の声」と呼ぶ人もいます。

### 重度の障害をもつ孫娘を助けるために犠牲になったおばあちゃん

岩手県大船渡市で起こった、重度の障害をもつ孫娘をめぐる老夫婦の災難を一年後のテレビ番組で知りました。なっちゃん(孫娘の愛称)はダウン症で全盲です。大津波が来ると悟った祖母は車で避難しようと、移動するのに時間のかかるなっちゃんを何とか励ましやっとなりに乗せました。しかし、このままでは間に合わないと判断した祖母は、「おらはいいいから、早く車走らせろ!」「頑張って生きろ!」と大声で車の発進を促し、発車した後から「バンザイ!バンザイ!」と叫びながら津波に飲まれてしまったそうです。

### 74名が犠牲になった「大川小学校」の悲劇

震災から2ヶ月過ぎた頃、児童108人のうち74名が犠牲となった宮城県石巻市立大川小学校の校庭での新聞記事に出会いました。小学2年生だった長男を捜すために、仕事を辞め、堆積し

た校庭の土砂をパワーショベルで毎日、日が暮れるまで掘り続ける父親の姿が写真で報道されていました。「息子を重機で捜さなくちゃならないなんて、悔しいね」とやりきれない思いを胸の奥に押し込めるように言葉を発していたそうです。

遠藤さんにしろ、大船渡のおばあちゃんにしろ、「もっと生きたかった」と「無念の思い」で亡くなられたに違いありません。

### 「はだかの心」宮城県仙台市立八乙女中学校長 菊池 省三先生のことば

校庭に避難所があつて2週間ほどした頃、ガソリンが手に入らず自宅から10kmを朝夕歩きました。そんなある朝、まだ夜が明けきらぬ歩道をうつむき加減に学校へ向かっていると、「おはようございます。……みんなで頑張りましょう。」という声を突然かけられました。驚きながらも思わず「はい、……頑張りましょう」と応えていました。見ず知らずの老婦人でした。しかし、それが自然のあいさつで当然の言葉でもあつたと、心のどこかですでに了解していたことに気付きました。そして、この言葉が、私達は支え合いながら共に生きるしかないんですよ、という人間の原点に立ち返った「はだかの心」を表しているとも感じたのです。

今回の大震災から、一人一人の力は弱く小さいことを思い知らされました。しかし一方で、意を同じにし小さな力を縦に横に合わせると、大きな力となり希望が見えてくることもはっきりと分かりました。さらに、私達人間には、他人の不幸を自分の不幸のように感じとる豊かな想像力がある事にも気付かされました。

生き残り未来を託された私達は、この豊かな想像力を駆使して、2万人近くにも及ぶもつと生きたかったはずの「無念の思い」を深く心に刻み、支え合いながら共に生きるしかないという「はだかの心」を決して忘れてはならないと思うのです。

なぜなら、それが、天災に限らず戦争を含めた様々な人類の不幸から他ならぬ自分自身の身を守り、生き残った者が果たすべき責任だと強く思うからです。

本来当たり前と思われていた地域の相互扶助やあいさつが、経済発展とそれに裏打ちされた核家族化やコミュニティの崩壊によって失われていったように思われます。その結果、互いに関わり合うことからどんどん離れた心を身にまとった生き方は、お金や物さえあれば一人でも生きていける、そして他人に煩わされることもないという危うい夢想ではなかったろうか。

あの朝、不意にかけられた老夫婦の言葉は、私達にこの妄想を捨てさせ、人間の原点となる生き方を追認させる力がありました。こうしたことから「はだかの心」という表現が浮かび上がりました。